

研究支援報告

森のようちえんにおける R 君の成長と変化

Growth and Changes of “R-kun” in the Forest Kindergarten

広島文教大学 人間科学部 初等教育学科

池上 友萌 鴨木ほのか 佐々木梨乃 寺本 夏帆 萩原 佑衣

備後 葵 松野 宏香 峯崎 奈々 山本 梨紗

広島文教大学 杉山 浩之

はじめに

子ども、特に乳幼児は自然体験によって五感を刺激され、自然体験は乳幼児の発達に重要であることはよく知られています。私たちは、大学のゼミ活動の中で、月1回の週末クラス「森のようちえん」ボランティアを継続しています。その中で、年少児の R 君と出会いました。この森のようちえんには毎回10人前後の年少から小学2年生までの子どもが集まるが、毎回来ているのは、今年は R 君だけです。遊び場は、主宰者の男性の H さんの家の裏庭と裏山で、野菜畑もあり、裏山にはターザンブランコもあります。H さんは自然の生き物についての知識が豊かで、森のようちえんリーダーの経験も長いです。

本研究では森のようちえんにおける R 君の成長と変化を、毎月継続的に観察することを通して明らかにすることを目的とします。また保護者および幼稚園の担任の先生にもアンケートや面談を通して、R 君についての理解を深めようと考えています。私たちが直接かかわる調査期間は、2019年5月～2020年3月です。それ以前にも関わっていたボランティアからも「これま

での経緯」(2018年度は6回参加)として情報収集しています。

I 研究結果

(1) これまでの経緯

R 君は2015年7月生まれの4歳児です。父親は庭師で花屋も経営しており、母親は歯科医です。弟が1人います。母親は日曜日も出張するなど忙しいため、普段から世話をしている最も信頼されているというスタッフのベビーシッターが森のようちえんにも送り迎えに来ていました。最近では近くの1歳年長の子の母親と一緒に連れて来ています。R 君は、友達がダンゴ虫を迷路ボックスに入れて見ていた時、突然ダンゴ虫を押しつぶすことができました。(これは庭師としての父親の行動を真似しているのだろうと父親からのコメントを頂きました。)友達が楽しそうにしている声を聞くと、そこに行って観察したり、遊びを独り占めしようと、年齢に関係なく相手を押しのけたり引っ張ったりすることがあります。年上の子と仲良くもなるが、物の取り合いでトラブルの末、譲ることはなく、相手を泣かしてしまうことができました。

(2) 観察記録から

6月22日 Hさんがバケツに入れていたザリガニをRくんが見つけ虫取り網で小屋に持っていきます。この時は、「人間とザリガニは同じだ」と言っており、餌や水を与えていました。途中で年長児と取り合いになるが譲ることはありませんでした。弱ったザリガニを渡さない女の子の脇腹を噛みました。

以上のことから遊びを邪魔されたくないという気持ちが衝動的行動をもたらすのではないかと考えました。

7月13日 弱ったザリガニを釜戸の火の中に投げ入れることもあれば、ダンゴ虫を飼おうとする女の子の手伝いをするもありました。友達と一緒に遊ぶ様子が見られましたが、N君が他児と遊んでいる所に、R君が横から入ったことにN君が怒ってもみ合いになりました。R君は服が汚れ泣いてしまいました。初め、R君の強引さに優しいN君は泣かされることがありましたが、次第に仲良くなり相撲で仲良く遊んでいる姿も見られました。

以上のことから、経緯で述べたダンゴ虫を潰す行為も踏まえて命に対する感覚が希薄ではないのかという疑問が湧きました。また、興味のある遊びに向かっていくときには周囲が見えず、相手の気持ちを考えることが難しいのではないかと考えました。

8月3日 朝、虫かごにバッタを入れて持ってきました。見つけたカマキリを捕まえ虫かごに入れようとしますが、友達に「バッタが食べられる」と言われ、バッタを逃がした後カマキリを入れます。キュウリを収穫し包丁で切ります。その際、O君と包丁を取り合い、周りから危ないと注意され、O君が諦めます。しばらくして、O君が包丁を取ると、R君は「貸して、と言わないとだめだよ」と叫び、再び取り合い

になりました。

バッタの命を心配する周囲の声に、敏感に反応しましたが、バッタの命を大切に思ったのかは不明です。可愛がろうという行動より、掴まえて入れて置きたいという所有欲求ではないかと考えました。また、集団で遊ぶ時のルールを知っていますが、まだ行動が伴っていないのではないかと考えました。

9月28日 朝から元気があり、よく喋っています。ごっこ遊びの場面で、キュウリを切っていましたが、N君が「このお皿に入れて」とお皿を渡すと「二人で作ったのでどうぞ。食べていいよ」と周囲に話します。

お昼前、皆で拾い集めた栗が入った籠をO君が持っていました。籠を奪い、「全部自分が持って帰る」と言い出します。K君に籠を奪われると泣き出します。Hさんが「一人5個ずつなら良いよ」と宥めましたが、R君は両手で持てるだけ取り、ドングリを入れていた虫かごの中にいれます。煮えたクリを皆が食べるときに、R君は「半分は切って食べるんだよ」と皆に言い、少し食べていました。

栗を確保できた満足感から気持ちに余裕ができ、食べ方を教えるという行動を促したのではないかと考えました。

(3) 保護者アンケート（8月）から

① 森のようちえんへの参加動機

森のようちえんという場所では本人が興味を持ったことを広げ、深められるような環境を大切にしているため、親の干渉がない所で、本人の思う存分自由に過ごしてほしいためとおっしゃっていました。

② 本人の様子

明日は森のようちえんの日だと前日に伝えると嬉しそうな様子で、当日はいつもより早く起

きるそうです。昼食時間も惜しんで全力で遊んでいることが伝わってきます。帰ってきたときは抜け殻のようにになっているそうです。

③ 保護者アンケート（10月）から

春から家でバッタやクワガタを飼っており、餌を与えて可愛がっている。普段から「みんなが楽しんで遊んでいるときに自分も行けばもっと楽しくなる」という思い込みが強い。いろんなことが出来るので俺様的なところがある。自我が芽生えた一歳の弟から囃まれることがあった。本人はそれまで囃むことはなかった。とお聞きしました。

(4) 幼稚園担任アンケート（8月）から

① 3歳になった9月から入園しています。

初めは「帰っておいで」と言っても戻らなかったそうです。今も順番待ちが苦手です。

② 褒めるとすごく喜ぶ。自分をアピールする。甘え方を知らない感じがする。理解力は高いが、否定語に敏感である。とおっしゃっていました。

③ 遊びを展開する能力が高く、同年齢の子には人気である。4月頃からは、小さい子や泣いている子には優しいが、年齢の大きい子には向かっていくようになってきた。興味のある遊びを見つけると遊びを奪う動きをする。身体が大きいので2歳上の子にも手が出る。上の子は遠目に「またやっている」と見ている。とおっしゃっていました。

④ 食べるのは遅い方で、お弁当の量が多いので、皆が遊び始めると、「置いていかれる」と言って泣き出してしまうそうです。

⑤ 一学期から二学期になっての変化

友だちから注意されることが減っている。今何をやる時か理解しており我慢が出来る。最近

は食べることに集中し食べるスピードが速くなった。以前は空いている席に座っていたが、今は仲の良い同級生の友だちと一緒に食べている。以前は友達より興味のあることが優先的であったが、今は友達を大事にするようになった。とおっしゃっていました。

II 考察

私たちは、R君の生き物に対する考え方や関わり方の多少の変化を感じましたが、命を本当に大切に思っているのかはまだ明確ではありません。一人遊びが多く、年上の子どもはR君を気に掛ける様子がよく見られたが、R君から友達に関わろうとする様子が見られた。しかし遊びに向かっていくときなど周りが見えなくなって相手の思いを無視する行為も消えておらず安定した人間関係の取り方ができているとは言えないだろう。

言葉で上手くは伝えられずにトラブルになることが多かったが自分の気持ちや思いを言葉にして相手に伝えられるようになってきた。上の②で述べたように衝動的な言動がいまだに見られる。

森のようちえんは月に一回という少ない頻度であり、一般的に言われるような自然遊びの教育効果が十分にR君に与えているようには思えないが、ここでしかできない体験をR君はしている。例えば釜戸に自分が投げ込んだ木やザリガニなどが燃えるのを見て楽しんだり、包丁を使ってキュウリや栗などの食べ物を切ったりする体験をし研究心や思考力が育っているのではないだろうかという考察をしました。

おわりに

以上のことからR君の成長と変化を考察した。子ども理解には様々な側面からのアプローチが必要であり家庭の育ちの過程と園での集団生活

の様子など多方面から分析していく必要があると学んだ。今後も R 君が異年齢集団の中で友達と関わりながら自然の様々な事象とも関わり、どのように成長と変化をしていくのかを見守っていきたいです。

主要参考文献

公益社団法人国土緑化推進機構編、『森や自然を活用した保育・幼児教育ガイドブック』、風鳴社、2018年。